

イノセント

インセスト

体験版
全7章のうちの
1－3章の一部が入っています。
目次はフルサイズ時のもので、体験版では
すべての内容は収められていません。

目次

1	真夏の情動……………	三
2	黄色い薔薇の双愛……………	五十一
3	愛の肛姦……………	七十八
4	止まらない愛欲……………	九十八
5	初めての絶頂……………	百三十六
6	処女の指導……………	百六十七
7	イノセントインセスト……………	二百二十六

真夏の情動

1

一ヶ月以上あった途方も無く長いと思つてた夏休みの残りも、あと数日を残すばかりにまてなつていた。

僕は、自分の机に向かつて夏休み前に出された大量の課題の山と向き合っている。といつても、今まで全然やっていなかったツケが溜まつていて、今更必死こいてがんばつてやっているわけじゃない。

今まできちんとコツコツ宿題はやっていた。

今日だつて一日のノルマと決めた分量をやっているに過ぎないのだ。

幸い閉め切られた部屋の窓は外界の喧騒をシャットアウトしてくれている。

外では、土の中で眠っていた長い年月に比べ、だった7日ほどしかない時間を使つて、次の生命を育もうとせわしなく鳴きつづけている、セミの声がうるさいのだろうけど、そんな鳴き声も、うっとおしいジメジメとしていて、アスファルトによつてさらに暖められた、熱い空気も入ってくることは無かった。

「父さんには、感謝だよなあ」

設計事務所社長である僕の父がデザイン、設計した一軒家は、それぞれの部屋にエアコンが取り付けられていて、冬でも夏でも快適に過ごせるようになっていいる。

体に悪いとは思いつつも、暑さに弱い僕は文明の利器の恩恵を、めいいっぱい活用しているというわけだ。

そんなわけで、勉強は極めて順調に進めることができて、もうちよつとで今日の分量は終わるそうだった。

僕はと言うわけか、期限内にレポートを完成させてしまうと『残りの時間を使ってもっと内容をよくはできないだろうか』『ここはちよつとおかしいんじゃないだろうか』などと読み返しては気になってくる所がたくさん出てきてしまつて、結局は期限ギリギリ、へたをすると修正することで期限をオーバーしてしまいそうになることがよくあつた。

それならばと、後ろ髪引かれることがあつても、もうどうあがいても修正することのできない、期限ギリギリに完成させた方がいいと思うようになったのだ。

夏休みの宿題も同じ。期限までの割り当てられた日数で丁度終わるように、一日どれくらいやればいいかを計算して、夏休みははじめから毎日コツコツ宿題をやるようにしている。

「ふう……」

一息ついて大きく伸びをした。机に向かっていると、自然と背中が丸まつてちよつと肩が凝つたからだ。

——コンコン

「祐麒いるー？」

ドアがノックされて、外から響いたのは姉の祐巳の声。

「いるよ。開いてるからどうぞー」

相変わらず僕は、大きく伸びをしながら返事をした。

「入るね。おじやましーす」

ガチャリ、とドアノブが回ってドアが内側に押し開かれた。

祐巳は、はじめひょっこり顔だけ見せたかと思うと、中をきよろきよろと確認してから、中へ入ってきた。別に素っ裸じゃないって。と、心の中で突っ込みを入れる。

前髪を目のあたりまでかかるくらいに伸ばしていて、後ろはというと肩くらいまである髪の毛を左右に分けてゴムバンドでまとめている。いつも見られる、祐巳が一番よくしている髪型だった。

ちよっと子供っぽいと感じられる髪型だったけど、祐巳の大きいくりくりとしたつぶらな瞳に丸っこい輪郭をした、いわゆる童顔と言われるような顔に、その髪型はぴったりと合っていた。きつと祐巳も、自分の顔に合っているのはこの髪型なんだろうなって思っているからしているのだろう。

祐巳は、手に氷がめいいっぱいまで入れられた麦茶入りのコップを持っていた。

「それ、くれるの？」

たまには気が利くことをしてくれるものだと思いますが、僕は、右手をコップに向かって出した。

「違うわよ。これは私の分」

祐巳はコップを持っていた左手を引っ込めた。

当然僕が出した右手は空を切る。

「あ、そう」

やっぱりいつもの祐巳だった。

髪型と同じで、そうそう心の中身も変わらないものだと思いますが姉を見つめる。

祐巳は肩が露出してスカート部分が幅広のワンピースを着ていた。

「暑いねー」

と言いながらスカートの裾を持って、パタパタとスカートの中に風を送り込んでいる。

よく見ると、祐巳の額や首すじは言うに及ばず、肩や腕、背中らびつしよりと汗をかいていた。

クーラーの及ばない外の世界が、如何に暑いものかを物語るに十分な汗の量だった。

あれ？でも、いままで祐巳は外にいたのだろうか？

「違うよ」

「じゃあ、なんで？クーラーは祐巳の部屋にもあるはずだろ？」

「いや、単につけてないだけ」

今日は、特に暑い夏日になるとテレビでも言っていた。

現にさつきちよつとトイレに言っただけでも、すぐに汗が吹き出たくらいだった。

「クーラーのあたりすぎは身体に悪いよ。それに、逆にここまで暑い日だとさ、クーラーつけたら夏に負けを認めたところになると思わない？」

「なんだよ、その理屈」

本人に自覚があるのか分からないが、祐巳は、時々他人にはいまいち訳のわからないことを言うことがある。

本人は自分で納得したうえでそれを言っているのだが、所々話の筋道を端折って言うているため、一度言われたくらいじゃ、他人にはそう容易に会話の意味を理解できるものでもない。

祐巳につつこんで尋ねて、祐巳が説明して初めて他の人間も『ああ、そういうことか』と納得できるのだ。

よく似ていると、自他ともに認める僕達姉弟だったが、そんなふうには姉の考えていることだけは理解することはできない。

どうやら似ていたのは、容姿だけだったらしい。

それを喜んでいいのかどうかは、複雑なところではあるのだが。

「要するにね、夏は暑くて当たり前。その暑さから逃げて、涼しいところで快適な生活を送るって事は、夏に背を向けて逃げ出していることになるのよ」

自分だって、この夏様子さんと避暑地に行っていたのではなかったっけ？

全然、理由になってない気もしたが、何故そこまで勝ち負けにこだわるところが良く分からない。

「言ってることは、何となく分かるけど……別に、夏に負けたっていいだろ？」

「だから現代っ子なのよ、祐麒は。だらしないなあ」

「悪いかよ？」

「別に悪くはないけどね」

結局勝ち負けにこだわっている理由はわからなかった。だが、わざわざ姉はそんなことを言いに來たのじゃないだろう。僕はこの部屋へ尋ねてきた理由を聞くことにした。

「で、何の用事？クーラーにあたりに來たんじやないんだろ？」

「ああっ、そうだった。ねえ、英和辞典貸してくれない？」

ちゃんと用事は覚えていたみたいで、僕はひと安心した。

ちよつと会話がわき道に逸れると、祐巳は本当の用事を忘れてしまうことがあるんだ。そうになると会話をわき道に逸らした事を怒る。

大抵は自分でわき道に逸れたくせに、僕のせいにしようとする。まあ、照れ隠しで人のせい

にしているのだなって事は顔を見ればすぐ分かったから、許してやることにしてる。

ただ、それが一度や二度ではないところを見ると、弟としては姉が将来ボケやしないだろうかと心配してしまうところではある。

こんな姉が学園では生徒会の人間（厳密に言えば違うのだが）で、後輩から羨望の眼差しを受け、尊敬を集めていることもあるという話をされても、にわかには信じることができない。だが、紛れも無くそのことは事実だというのだから、世の中どうなっているかわからない。

かく言う僕自身も、生徒会長の立場にある自分自身をいまだ信じることができないのだから、姉弟ふたりとも、数奇な運命の元に生まれたとしか思えなかった。

普段はおっとりしている父を見ても、その血を引く自分達姉弟が、そんな目立ったことをできるなんてこと到底思えなかった。しかし、一見頼りなく見える父親も社長の立場にいるのだから、意外とぼくたち姉弟は二人は、人の上に立つ要素は受け継いでいるのかもしれない。不本意ではあるが。

おっと、ぼくのほうがわき道に逸れてしまった。話を本題に戻すでしょう。

「英和辞典なら、祐巳だって持ってるじゃん」

「祐樹のほうが、新しいでしょ？私のお父さんのお下がりだから、古くてかなり痛んでるし、それに字が小さくて読みにくいんだもん」

『物は大事にしろ』というのが、父親の口癖だ。そのおかげで、我が家の使っていない物置

代わりにしている部屋には数え切れないほどのガラクタと呼んでいい物が、山ほど押し込まれて眠っている。それには、ぼくたちが赤ちゃんだった頃のガラガラやら、ベッドなんかまであって、それを見た時はさすがに閉口した。

そういうものは普通ゴミに出さないにしても、誰か近所で子供を生んだ人に譲ったりするか、処分する方法は他に色々あったんじゃないだろうか。

そんなわけだから、英和辞書くらいのものであれば、父が現役学生だった頃の物が今でもぼちり残っていて、僕達姉弟のジャンケンという厳格な勝負の結果、父の英和辞典は祐巳に受け継がれていたのだった。

確かに祐巳の言っているように、辞書は見た感じぼろぼろだ。端っこは擦り切れていたり、紙の端は変色しかかっていたり、色々なところに父親がつけたらしい線が引かれていた。覚書まであったりとかかなり使い込まれたことがわかる。

普通に使うのには何の支障も無いが、昔の辞書っぽい、なんと言うかデザインが古臭くって、それに小さい文字で一ページびつしりとたくさん情報で埋め尽くされているので、今の辞書に比べたら読みにくい事このうえないものだ。

まったく、僕が使うんじゃないかって本当に良かった。ただでさえ、辞書で文字を探すのは億劫なのに、父のお下がりの辞書を使っていたらと思うと、うんざりしていたところだ。

幸い英和辞典なんて物が家に何冊もあるはずも無く、ぼくのは新しく買ってもらったもので、

現在も活躍してもらっている。

幸いもう英語の宿題は終わっていたから、祐巳に貸しだすことには何の支障も無い。

「わかった」

机の上に並んでいた参考書などの中から、英和辞典を取り出すと祐巳に手渡した。

「はい」

「ありがと」

「ちゃんと、終わったら返してよ」

「わかってるって」

用は済んだとばかりに、祐巳はドアを開けて部屋から出て行こうとした。

むわっと廊下の熱い空気が、部屋の中の冷たい空気を押しのけて入ってくる。

机に座っていた僕にも、もちろんその不愉快な空気は届いてきてる。

祐巳はいつまでたってもドアの仕切りの前に立ったまま、動こうとしなかった。

たまらず僕は、祐巳に声をかけた。

「早く閉めてくれよ……暑いだろ」

そうしたら、祐巳は廊下に出ていくどころが、再び僕の部屋の中へと引っ込んでしまった。

「まだ何か用？」

「いやそうじゃなくて……もうちょっとここで涼みたいなー……なんてね、えへへへ」

コップと辞書を僕の机の上に置くと、祐巳はバツが悪そうに頭をかいた。

「まったく……」

僕のことを現代っ子と揶揄したくせに、所詮は祐巳自身もその『現代っ子』だったわけだ。ちよつと呆れてしまった。

「やっぱり熱さに弱いんじゃない……」

「一度涼しさを知ってしまうと、どうにもその誘惑からは逃れられないのよね」

まるで、野生の動物が民家に侵入して、人間が食べている食べ物の味を知ってしまったら、度々出没するようになってしまったとかいう、ニュースのようなものじゃないか。

祐巳は、どかつとぼくのベットに腰掛けると、エアコンから送られる冷たい風を体いっぱいを受けていた。しばらく居座るつもりのようなのだ。

「んー、涼し……」

「直接当たると、身体に悪いって言ったのは誰だっけ？」

「ちよつとだから、大丈夫よ」

半ば呆れつつも、僕は同じ顔を持つ姉を見つめていた。

髪形が違う所を除けば、基本的な顔のつくりは鏡に映したかのようにそっくりだ。

何でこんなにもよく似ているのだろう。

祐巳自ら狸顔と評するその顔は、周囲のみんなに『かわいい』と言われることこそあれ、間

違っても美しいとか言われることはない。

祐巳の『姉』である様子さんが、こんな祐巳のどこが気に入ったのだろうと不思議に思う。様子さんは美しいとか、かっこいいというような言葉が似合うほど、整った顔立ちをしている、まるで女王様という雰囲気をもし出している。

その様子さんは、祐巳に異常と思えるほど依存してるらしくて、正直言つてそこがどうも不思議で理解できない。

祐巳には、ちょっとだけ表情を変えてうつすら微笑むのではなく、にっこりと顔全体をつかつて笑いを表現するのが似合っている。

丁度、今浮かべているその顔だ。

子供っぽいなと思う。でも、祐巳に当てはまるということは、当然同じ顔をした自分にも当てはまるのだ。

僕は、祐巳を通して自分の評価をしていたことに他ならない。

僕だって、かっこいい男というものには憧れを持っていたりする。あ、決して柏木先輩の様にではなく。

祐巳の顔を見ていると、つくづくそういうことに向いていないと思い知らされるので、つい日常では祐巳に毒づくことも多い。

祐巳と会話していると、度々祐巳もぼくに怒ったりもする。本気で怒っているわけではない。

姉弟の軽いスキンシップみたいなものだけだ。

「何？勉強の続きしないの？」

僕の視線が、ずっと、自分に向けられていることに気がついたのだろう。

きよろきよろと部屋を見回していたり、窓から外を眺めていた祐巳の顔が、僕の方を向いて、自然僕達二人の目と目が合った。

何故か、かあっと顔が熱くなった。

「祐巳が居ると、集中できないんだよ」

照れ隠しで、僕は祐巳に毒づく。

「あー、ひどい」

ほら、こうして怒るんだ。

怒りつつも、その表情には笑顔が含まれている。

僕が本気で言っているんじゃないことを分かっているから。でも、祐巳に見られていると思うと、集中できないと言うのは本当だ。

何でだろう。思わず僕は、祐巳の目線から逃れるために下を向く。

「あら、どうしたの？」

それがまた、祐巳の気を引いてしまったらしく、祐巳からさらにつっこみが入った。

「な、なんでもないよ」

祐巳の顔を見て顔を赤くしたなんて事、恥ずかしくて答えられるはずもなかった。

「えー怪しい……絶対何かあるでしょ？なに隠してるの、教えなさいってば」

「本当になんでもないんだったら！」

僕はもしかすると祐巳が……そう思うと恥ずかしくて、顔が見られるわけ無い。

僕は机の方に体の向きを変えて、祐巳から顔を隠した。

一年と離れないで生まれたせいで年子。同じ学年で姉である祐巳。

昔は僕達二人はほとんど背丈が同じだった。

背丈にちよつとずつ違いが現れるようになったのは、ここ一、二年のことだと思う。

そして今では、すっかり僕の方が背が高くなった。

基本的な骨格や手や足の長さなど、気がつけば違うところはいっぱいあって、顕著にわかるようになってきていた。

昔は一緒にお風呂にだって入った事もある。

チラッと祐巳の股間を除いたときに、自分のつくりと違っている事実になにかいけないものを見てしまった気がした。

その時、祐巳と自分は根本的に違うんだということを意識するようになった。やがて一緒にお風呂に入ることも無くなって、それは同時に二人が男と女という、性の違いを意識しだしたからに他ならなかった。

祐巳の胸はぷっくりと膨れだしていった。僕の身体は骨格がしつかりとしてきた。徐々に、だが、確実に二人の身体は男と女へと別れていったのだ。

僕の方はこうした違いを意識することが良くあつてどぎまぎすることがある。だが、祐巳のほうはというと、僕が男であることを、あまり気にしていないんじゃないかとさえ思えるときがある。

普段、居間でソファーに腰掛けている時もスカートのままで足を抱きかかえてテレビを見ていてパンツが丸見えになっていたり、

薄着でブラジャーも着けないまま歩き回って、服の脇からその小ぶりなおっぱいがちらりと見えてしまうこと。

お風呂から出たばかりの祐巳と遭遇した時は、怒るというよりは困るという感じ。もつとはつきりそこで怒ったりしてくれた方が、どれだけ良かった事か……祐巳は分かっている。

「人の気も知らないで……」

「え？なに？」

本当に何も分かっていない姉がちよつと憎らしくもある。

「もう、辞書使わないなら返してくれよ」

と、机の上に無造作に置かれていた辞書を、本棚に戻そうとする。

「だめよ、本当に使うんだから」

取られまいと、祐巳が辞書の反対側を引っ張って僕から奪った。胸に抱えるように大事に驚づかみしている。

それでも僕がムキになって、その辞書を取り返そうとした時だった。

「あ！……きゃあ！」

やばい、足が引つかかった。ぐらりと祐巳の体が傾いた。

「あ！」

危ないと思った僕は、祐巳が頭を打たないように腕を回して抱きとめる。

それでも勢いは止まらず、ベッドの上に着地するようにずらすので精一杯だった。ぎしぎしとベッドが軋んで二人分の体重を受け止めた。

「だ、大丈夫？」

「う、うん……ごめんね」

「いや、俺の方こそ、悪い」

祐巳の体と顔が僕の眼前にあった。

呼吸をするたびに胸がわずかに上下に動いてるところまでわかる。

ちよっと手を伸ばせば、その息づく胸に触れてしまえそうなのにあるのだ。

「祐麒、どうしたの？早くどいてよ……」

僕がいつまでもどかないのをいぶかしんだ。

「やだ……」

何故その言葉を口に出したのか、僕自身も信じられなかった。

2

「え……なんで？」

なんでだろう……僕は自問する。

「いつもそうなんだよ……」

「え？」

祐巳はいつも肝心なところで、人の心がわかっていない。

「なんでいつも……」

「怖いよ？祐麒……」

「オレだって、男なんだよ」

「そんなこと……当たり前じゃない」

別に性別のことを言っているんじゃない。

問題は僕が男で、そして祐巳が女って事なのだ。

「違うんだよ。そうじゃないんだって……問題なのは、祐巳が女って事なんだよ」

「それもわかってるよ？」

「じゃあ……どうしてそういつも無防備なんだよ！」

「だって姉弟じゃない……」

「俺はそうは思っていない……」

「それってどういうこと？」

って事は、もう一つしか考えられないじゃないか。本当に鈍い。

ここまで来ても祐巳の顔には、ハテナマークが頭の上に浮んでいるのがふさわしいような顔をしている。

思ったことが、素直に顔の表情に出る姉のことだ。決して冗談を言っているのではないことが分かった。

僕は焦れったくなった。

「俺は、祐巳のことが好きだって事だよ！」

ついに言ってしまった。

「ええっ！」

そう僕は……祐巳が好きだ。

だってそうじゃないか。男子だけしかない高校生活。

身近に感じる事ができる女の子っていうのは、実の姉の祐巳しかいなかったのだから。僕は、この気持ちに気がついてしまった。認めてしまった。

ずっと今まで我慢していたけど、それも限界だった。

僕は祐巳の両腕を持って、左右に広げるようにベッドに押し付け、固定した。

「や……」

ただならぬ雰囲気気がついた祐巳の瞳が、不安げに僕を見つめてくる。

祐巳は腕を振りほどこうともがいた。だが、僕が上から押さえつけていることもあって、ひ弱な女の子の力では、一応男である僕の拘束を振りほどくことなど所詮無理な話だった。

それでもあきらめずに、祐巳は何度ももがくので、僕もかっ頭血が上っってしまった。若い身体に溢れる劣情を押さえつけることは自分自身でも不可能だった。

小さくピンクに色づく唇に狙いを定め、僕は顔を近づけていった。

そのまま僕は祐巳の唇を奪った。

「んん！」

祐美がめいっぱいに目を見開いて、天井を見つめていた。

「ん……」

祐巳の目からは、涙が流れ落ちた。

両目か溢れた涙の雫は、目尻を伝わって左右に流れてベッドのシーツに零れ落ちる。

「はあ……」

十秒くらいだったろうか、もっと長く感じたけど、そのくらいの時間僕は祐巳の唇にキスをしていた。

「こんなことするなんて……どうして……」

「祐巳が悪いんだよ」

いつまでも、何を言ってもぼけっとしていて鈍い。そういうところが。

「どうして？私のどこが悪いっていうのよ……」

怒るんじゃないくて、祐巳の顔には、おびえた表情が浮んでいた。

「無防備すぎるんだよ……よく、パンツちらちら見せてるし。胸だって、ブラジャー着けてないときあって、服の隙間からおっぱいが見えちゃったりしてさ、今もそうだろ？ブラジャー着けてないし。俺だって男なんだよ。そんな風にされてたら、たとえ実の姉だって言ったらって欲情しちゃうんだよ！」

「姉弟で、そんなこと……普通に考えたらおかしいよ」

普通ならおかしいだって？

そう、それなら僕は異常ってことだ。でもしょうがない。祐巳や世間の人間が異常だと思えることが、僕にとっては正常な事なのだから。

「わかってるよ。でも、しょうがないじゃないか……好きになったのが実の姉で悪い？」

「祐麒……あつ何するの？」

僕は祐巳のワンピースを捲り上げた。太もものつけ根からは、かわいらしいコットン製の純白のパンツがチラリと見えた。

祐巳の、純真さを表しているかのような真っ白な色。さらに僕は乱暴に上へと捲っていった、祐巳に万歳させるような形で脱がした。

そのままワンピースで腕を拘束するように、押さえつける。白くて、柔らかそうな肌が露出する。

思っていたとおり、祐巳はブラジャーをつけていなかった。

少し小ぶりな祐巳の胸。

ふたつの乳房の上には、かわいい桜色の乳首がふたつ乗っかっていた。

「や……だめえ……」

じたばたもがく祐巳の足も押さえつける。

もがいたことでだいぶ体力を消耗してたらしい。呼吸が乱れていて息をするたびに胸が上下に動いている。

「祐巳っ！」

僕は名前を叫ぶと、たまらず祐巳の左胸の乳首にしゃぶりついた。

「んあっ……」



黄色い薔薇の双愛

2

私は令ちゃんと一緒にお風呂にはいった後、二人ともバスタオルを身体に巻いたままの格好で部屋に入った。

温かいお湯に温められた肌はほんのりと上気していて、令ちゃんの普段決め細やかな真っ白な肌はうつすら桜色に染まっていた。

私も同じ。まるで病人みたいな……まあ一年前まで本当に病人だったのだけど、その真っ白な肌にも朱が差していた。

二人してセミダブルのベッドに横に並んで腰掛ける。右を向いてちよつと上を見上げれば、そこには令ちゃんの顔がある。

「令ちゃん……んー」

目をつむって、ちよつとだけ唇を突き出し顔を令ちゃんのほうに向けた。

キスをして、という合図だった。

「由乃……」

そこに私が本当に居るのか確かめるかのように令ちゃんは私の名前を呼んで、それから私の

唇に口をつけてきた。ほんのり甘い香りが、令ちゃんの唇から漂うのが分かった。

本当は女の子同士でこういう事はしちやいけないんだって分かってる。でも私は、私達は我慢できなかった。

お互いの心にぽっかり空いた隙間を埋めるかのように、自然と唇と唇、体と体は重なっていった。

ただ、それだけのこと。

唇の隙間から舌を突き出して令ちゃんの唇を小突いた。

「ン……」

令ちゃんが口を開いて舌を受け入れる。

デープキス。

歯茎に沿ってなぞるように舐めまわす。

「あン……」

令ちゃんの喉の奥から声が漏れた。

「ふン……」

耐えられなくなったのか令ちゃんも、私と同じように舌を突き出してきた。たちまち私達の二枚の舌は、複雑に形を変えながら絡みついた。

普段は左右に分けて編みこんでいる、私の腰まである長い髪の毛は、現在垂れ下がるがまま

になっている。

まだしつとりと濡れていて、いつも三つ編みにしていたせいか、ちよつとだけウエーブがかつていた。その髪の毛を、令ちゃんのが手櫛でくしけずったあと、私の肩にそつと手を添えた。



髪の毛に神経は通っていないはずなのに、何故か私はそれが気持ちよかった。

「はむ……ン」

「令ちゃん……ン……ちゅっ……くふ」

お互いの舌と舌をむさぼるように舐めあって、自然と湧き出る唾液を互いの口の中へと送りあう。あまりに夢中で、口元からよだれがこぼれるけど気にしない。

今ここで唇を離すのはもったいなくてできないから。

部屋の中には、口の中に溜まった唾液が舌でかき回された時に発する淫靡な水音と、二人の乙女が互いを求め合う嬌声が響き渡る。

仮にも、お嬢様学園と呼ばれる学校に通えるくらいだから、自分で言うのもなんだけど家は裕福な方である。防音バツチりな私の部屋は、ドアと窓を閉めてしまえばよほど大きな声じゃない限り外に漏れてしまうことは無い。だから、私達は周囲を気にすることなく喉の奥から生じるソプラノで思う存分ハーモニーを奏でることができた。

「うふ……」

ひとしきり令ちゃんを味わって、顔を上げっぱなしにしたのでさすがに首が痛くなってきた。惜しいけどここで顔を離すことにする。

「令ちゃんの唇、柔らかくっておいしかったよ」

「由乃のも……おいしかった」

最初は戯れみたいな感じだった。

子猫同士がじゃれあう同士みたいなスキンシップ。

それがいつの間にか大胆になってきて、

「キスしていい？」

「え？」

つて我慢ができなくなつて、私のファーストキスは令ちゃんとだった。

もちろん、令ちゃんのファーストキスは私。

その後、自然と身体を求め合うようになったのは、必然といつてもよかった。

「ね……令ちゃん、舐めっこしようよ」

身体を百八十度ぐるっと回して、私は令ちゃんの股間の方に頭を向けた。

「あっ……」

令ちゃんの足を左右に押し開いて、まだ開いていない乙女の秘密のつぼみに、指を添える。

私の股間も令ちゃんの顔の上に来るようにまたがって、足を開いて令ちゃんにあそこがよく

見えるようにしてから腰を下に落とした。

「んあっ」

令ちゃんの顔に押し当てた。

私はぷつくりと盛り上がった令ちゃんの恥丘を見つめる。

性器周辺、特に大陰唇部につく皮下脂肪は女性ホルモンの影響を大きく受ける。膨らんだ恥丘は、十分なホルモン分泌によって作られた完成された性器の証らしい。

女らしい性格が示すとおり、女性としての感覚も鋭敏に作り上げていると言えるのだった。令ちゃんが少女小説を読んで、誰よりも異性との恋愛に、心ときめかせていたのも分かっている。

「由乃？」

おつといけない、いけない。何もしてこないの、令ちゃんが話し掛けてきた。

「もう、令ちゃんたら、そんなに早くして欲しいの？」

「そっ、そんなんじゃない？：：由乃が、じつとしてるから、私は心配して」

「はいはい」

わかってる。

令ちゃんが私を気遣うたびに、私の胸は、ジーンと熱くさせられるんだ。

よーし！と心の中で気合を入れて、私は挑むのだった。

そう私が考えている間にも、由乃は勝手にどんどん進めていた。

四つん這いになった由乃は、私にその小ぶりなお尻を見せつけるようにしながら、殺菌効果のあるローションを指に塗りつけると自らのお尻の穴の中に指を入れた。

本人が言うにはちゃんとアナル用のローションということらしいが、そもそも普通のローションなんて見たことの無い私には、どこがどう違うのかわからなかった。

「まずは……私からっん……あっん」

始めは指一本だけを入れて、根元まで入ると中で軽くかき回す。

それを見ていて、思わず私の身体もうずいてしまう。

「あん……ん」

一度指を引き抜くと、今度は人差し指と中指の二本をお尻の穴に再び入れた。

「くうう……ふうん！」

ちよつときつそうに呻き声を上げているが、何とか由乃はそれを根元まで入れた。

「あん……んはっ！」

指をバタ足をかくように上下に入れ違いさせるように交差させる。
気持ちよさそうな声が、由乃の口から発せられた。

「よ、由乃……」

私は、ただその様子を見ているしかない。

「はあ……はふ、このくらいでいいかな……」

指を引き抜いて、腸の中に程よくローションがまぶされたことを確認した由乃は、直径二センチくらいの、ピンク色をしたアナル用のバイブレーターを持った。

お団子のようなものが四つほどついていて、それぞれの直径は先端から根元に行くほど大きくなっている。

ピンクの色からしてそれはどこなくエッチな雰囲気をもし出している。

由乃がバイブレーターのスイッチをONにすると、それはブーンと低い唸りを上げて振動した。

「ねえ、令ちゃん入れてくれる？」

「えっ！……嫌よ……」

腸の内壁は繊細だ。もし手元が狂って傷つけたら、と思うと私からする気にはどうしてもなれなかった。

「令ちゃんの意地悪……いいよ、自分で入れるから」

はじめから私は嫌だということは分かっていたのだろう。その口調は決してきびしいものではない。

ただ、試しに言ってみただけということが分かる。

由乃はバイブの先端をお尻の穴の入り口にもってくると、ぐっとそれを押し込んだ。

「くン……ンあっ……ああ……入ってくるよ……私のお尻の穴、広がってる……」

ピンク色のバイブの先端が由乃のお尻の中に飲み込まれた。

バイブの直径の大きさにあわせて、由乃のお尻の穴が広がる。

お団子がつながっているところ、丸くへこんでちよつとだけ直径が小さくなっているところ、一旦めいいっぱいまで広がりきったお尻の穴を休ませるかのように、少しだけお尻の穴が元に戻る。

「まだ、いけそう……」

これまで何度も同じ事をしてきただけに、由乃のお尻の穴は段々と大きくなるお団子の直径にあわせて広がってはへこんだところで縮み、あつというまに四個あるお団子の三つまでもお尻の穴の中に飲み込んでいった。

「くうう……んあ！」



copyright 2005 美遊穂堂

感想、苦情、その他の受付はこちらまで
miyuuhodoh@yahoo.co.jp